様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０２６５

研究課題名（和文）エミリ・ディキンスンによる聖書の書き替え

研究課題名（英文）Emily Dickinson's Revision of the Bible

研究代表者
小泉　由美子（Koizumi, Yumiko）

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：６０１７８５５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：従来明確な解読がされてこなかったEmily Dickinsonの宗教詩を当時のキリスト教関連資料を読解することにより、代表的宗教詩の「意味」を解読し、Dickinsonを宗教詩人として考えうるという可能性を指し示し、19世紀アメリカ合衆国東海岸の宗教潮流の中に配置されうる可能性を証明した。
　詩分析の結果、Dickinsonは1848年冬、信仰復興運動盛んであったマウントホリオーク神学校にて、「人間イエス」を発見し、「絶望」から救われた事実を「斜陽」のテクスト分析と当時書かれた手紙から証明した。また南北戦争中に書かれた作品を歴史的文脈で再読すると、当時の宗教文化の影響が見られることを論証した。

研究成果の概要（英文）：The research aims at revealing some meanings of Emily Dickinson's religious poems,which had not been fully examined and thus regarded as unreligious poems. Taking the religious background of the 19th century America into consideration, we can understand that the poet had been saved to have found out "human Jesus" on earth as an alternative way to do a confession of faith.
Dickinson's "a certain Slant of light" consists of powerful images or metaphors, which evoke strong memories of "Winter Afternoons." The metaphors in the poem are figures of the inner life and do not seem to have any direct connection with winter or with light. But the poem is also written based on the poet's personal experience. Add to the personal background behind the poem, and you can comprehend all the more natural and compelling power of its metaphors. As a result, the poem could be interpreted as a religious poem.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：エミリ・ディキンスン　宗教詩　聖書の書き替え　隠喩

1.　研究開始当初の背景

Emily Dickinson の信仰に関しては、批評家の間で議論が大きく分かれる主題の一つである。20 世紀初頭、New England Calvinism の伝統の中に詩人を位置づけようとする批評家がいる一方で、Tate は Emerson と Hawthorne の中間地点に彼女を神学的に位置づけようとした。1960 年代、Pearce と Waggoner が文学史上 Dickinson を Emerson の伝統に入れたことにより、彼女をロマン派として考える流れが構築された。1969 年 Donoghue は、Dickinson は聖書を修辞学のマニュアルとして使用したにすぎないので、宗教を中心的主題として議論すべきではないと主張するに至った。70 年代、80 年代に入り、フェミニスト批評家も同様に宗教的イメージは隠喩以外の意味はないことを強調した。

しかし一方で、Oberhaus や New 等のように、Dickinson を宗教詩人として再考し、彼女を 17 世紀の祈祷詩人の伝統に属する詩人であると主張する批評家もいる。また伝記作家 Habegger は 1850 年代の宗教潮流から詩人を切り離すことの危険性を警告し、再度歴史的文脈の中で捉え直すことの重要性を強調している。

上記の様な読み直しに対し、「Dickinson を宗教詩人と呼ぶのは危険だ」と警告する Farr の様な批評家、Dickinson 研究において、宗教は「問題を孕んだものだ」とする Wolosky の様な批評家もいる。この微妙な問題に対し説得力あるアプローチを提案したのは Eberwein である、「重要なのは詩人の宗教に関する発言から一貫しているものを掬い取ることである」。

過去 10 年間の研究を通し、彼女の宗教詩読解に関し議論が分かれる要因の一つは、有効なテクスト分析の方法論が見出せない点にある。New が言うところの「言及の中心的システムを骨抜きにすることにより神を求める Dickinson 独特の詩的言語」を解読する最善の手段が見出せていないことに起因し、結果として詩人のメッセージは正確に伝えられることはないのだ。

国内外で発表された宗教詩に関する論文は、宗教詩の分析において、「詩形」と「意味」の対応関係を考慮に入れ、実証的に明確な「意味」を紡ぎだしている論考はほとんど書かれていないのが現状である。

２．研究の目的

本研究の目的は、「聖書の書き替え」というテーマで、Emily Dickinson の代表的宗教詩を解読することである。

従来 Dickinson 研究に欠けていた次の 3 つの視点からアプローチすることにより、総合的に「意味」を紡ぎ出す。(1) 「詩形」と「意味」の対応関係、(2) 草稿読解と 1850 年代の宗教関連資料の収集・読解、(3) 文学、言語学、宗教学の学際領域からのアプローチにより、Dickinson の代表的宗教詩の「意味」を解読し、最終的にこの時期の詩人の信仰に関する一定の考えをまとめ上げることを目的としている。

３．研究の方法

本研究は、年 2 回 Harvard 大学 Houghton Library における草稿読解とキリスト教関連資料収集・読解を行いながら、日本で論文執筆を並行して行う。

当図書館には、Dickinson 家蔵書 600 冊が収められている。電子化されていないキリスト教関連資料、当時の説教集等の資料収集・読解を経て、Dickinson の代表的宗教詩の精緻なテクスト分析を行う。

４．研究成果

(1) 論文 3 件。著書 1 冊、訳本 1 冊。　国際会議研究発表 2 件(米国メリーランド大学、パリ国際大学)。国内学会研究発表 3 件。　その他研究発表 8 件。

(2)① Dickinson の宗教詩と最終連完全脚韻の相関関係を検証した結果、南北戦争下の会衆派の宗教文化の影響があることを証明した。部分韻の名手として有名な詩人が 1860 年代初頭、完全韻を使用し、かつ黙示録のイメージで最終行を閉じた。その詩人の意図を解読したところに論文の意義はある。

脚韻分析を通し、「天上の音楽」を奏でようとする詩人の意図を解読し、彼女が自らをモーゼやイエス・キリスト等の預言派詩人の伝統に位置づけていることを証明することができた。抒情詩において叙事詩的テーマを歌うことができた詩人としての可能性を示せたことは意義深い。

国際会議では「詩形」と「内容」の対応関係という新しいアプローチからの分析で Dickinson 再評価に繋がると高く評価された。

②南北戦争中に書かれた作品を歴史的文脈で再読した。従来恋愛詩として解釈されてきた作品を宗教詩としても解読できる可能性を示した。

南北戦争中、宗教的大義名分を掲げ戦った 19 世紀アマーストの会衆派共同体に対し、敢えて宗教用語を駆使し恋愛詩を書いた詩人の政治的意図を読んだ。南北戦争という歴史的文脈を入れて恋愛詩を精読することにより、新たな解釈の可能性を示したことに意味がある。

③Dickinson の代表作「斜陽」の構文、韻律、隠喩の特殊性に注目し、信仰を吐露した宗教詩と解読し、彼女が敬虔なキリスト教徒としての一面を持ち合わせていた事実を証明した。

従来詩人の内面世界を表象する隠喩で「斜陽」は構成されていると考えられ、詩人の個人的体験とは無関係であると解釈されてきた。しかし、この作品の隠喩は観念の言葉ではなく、Dickinson が 18 歳の時、1848 年の冬マウントホリオーク神学校での体験した「重

圧」を表現したものであることを証明した。また、そのとき「人間イエス」を発見することにより、「絶望」から救済され、キリスト教信仰に目覚めたのではないかとの可能性を指摘した。

国際会議では、詩人のメタファーの特殊性の分析を通し、メタファーを通し「時代」を刻むことができた稀有な詩人としての Dickinson 像提示に関心が集まった。The EDIS Bulletin に要旨と評価文が掲載された。

④総じて、「詩形」と「意味」の対応関係を考慮に入れ、歴史的文脈の中で精緻なテクスト分析をすることにより、従来の読み方とは異なる読みを国内外に提示することができた事は意義深い。また分析の結果、詩人は 1848 年信仰復興運動盛んなマウントホリオーク神学校にて「人間イエス」を発見し、「絶望」から救済された事実を証明し、宗教は詩人の中心的テーマであり、彼女の詩作品の基底には当時の福音主義の影響がある事を詩分析で証明できた事により、今後 19 世紀アメリカ合衆国東海岸の歴史に関わった事実をさらに提示しうる可能性を示した。また、従来「戦争詩」「恋愛詩」と解釈されてきた詩郡を 19 世紀宗教社会との連関で読み直しうる大きな可能性を提示できたことは意義深い。

結果として、これまで「無神論者」とか「反キリスト教徒」とかレッテルを貼られてきた詩人を、19 世紀アメリカ合衆国東海岸の宗教潮流のなかで捉え直すことにより、当時の社会からの「隠遁者」ではなく、政治、社会的意識を持ち詩作した偉大な詩人として再評価しうる可能性を示せたことが意味深い。

(3) 今後の展望

過去 4 年間の研究において、Dickinson が聖書を書き替えた詩人であることを解明し、1848 年冬、マウントホリオーク神学校時代に「人間イエス」を発見し、詩人が「絶望」から救済された事を証明したが、彼女の思想を織り込んだメタファーの意味を解読できないと、最終的に宗教詩解読はできないと理解するに至った。宗教、哲学、科学、文学等の複数の学問領域が交差し、「神」の存在が問われた宗教的時代に、詩人が創造したメタファーもまた、複合領域の複合体である可能性がある。

Dickinson のメタファーの特殊性、彼女の言うところの「アメリカ的メタファー」とは何なのか、可能な限り具体的に分析する必要がある。メタファーの効力を最大限発揮することができた秘策を解明することにより、メタファーにより「時代」を彫刻しえた天才詩人像に迫りたい。

具体的には、ピクチャレス・アメリカの歴史的文脈の中でディキンスンのメタファーを捉え直すことにより、自然の写実と「人間イエス」の相関関係について、Ruskin 全集読解を通し解明したい。風景の写実的迫真性と詩人が位置する窓のある現実空間が互いに作用しあい、聖なるものとの遭遇が描かれる詩郡において、詩人の鋭い自然観照と巧みな技法を分析する。

今後文学、宗教、言語学の学際領域からの複合的方法で、宗教詩におけるメタファー分析を通し、「人間イエス」の発見がなされた経緯を当時の文献を克明に読解することにより解明し、詩人を歴史的文脈に配置することを研究目的とする。

(4) その他

① 平成 25 年度よりディキンスン学会首都圏研究会を早稲田大学にて開催し、8 回の研究発表を行った。

② 思潮社刊『現代詩手帖』2017 年 8 月号（ディキンスン特集号）にて、2 編の宗教詩の訳と訳注を担当する予定。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Koizumi, Yumiko Sakata, “The Meanings of Emily Dickinson’s ‘Winter Afternoons’ as Metaphors in F320,” Studies in Humanities and Communication [Ibaraki University] Vol.19, 13-21. 2015. 査読無

② Koizumi, Yumiko Sakata, “ The Transformative Possibilities of Suffering in Emily Dickinson’s ‘there came a Day - at summer’s full-’ (F325)”, Studies in Humanities and Communication [Ibaraki University], Vol.18, 13-21. 2014. 査読無

③ Koizumi, Yumiko Sakata, “Emily Dickinson and the Music,” Studies in Humanities and Communication [Ibaraki University], Vol.15, 57-69. 2013. 査読無

〔学会発表〕（計 4 件）

① 小泉 由美子、「ディキンスンの風景詩学を考える」、日本エミリィ・ディキンスン学会弟 32 回年次大会、2017・6・17、駒澤大学（東京都世田谷区）。

② Koizumi, Yumiko 、 “Dickinson’s Metaphors Evoking Memories of ‘Winter Afternoons’”、エミリ・ディキンスン国際会議第 9 回大会（EDIS International Conference）、2016・6・25、パリ国際大学（フランス、パリ）。

③ 小泉 由美子、「 “There’s a certain Slant of light” を読む」、日本エミリィ・ディキンスン学会弟 30 回大会、2015・6・20、駒澤大学（東京都世田谷区）。

④ Koizumi, Yumiko, “Emily Dickinson and ‘that keyless Rhyme’”、エミリ・ディキンスン国際会議第 8 回大会(EDIS

International Conference)、2013・8・9。（メリーランド州、アメリカ合衆国）

〔図書〕（計　2　件）

① 新倉俊一監訳、東雄一郎、江田孝臣、朝比奈緑、小泉　由美子訳、思潮社、『完訳・エミリ・ディキンスン詩集』(2017-)思潮社、394-433, 654-708, 脚注。

② 小泉由美子、金星堂「天から斜陽が刺し込む」、『私の好きなエミリ・ディキンスンの詩』、2016、60－69.

６．研究組織

(1) 研究代表者

小泉　由美子（Koizumi Yumiko）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：60178556

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し

(4) 研究協力者

岡崎　正男（Okazaki Masao）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：30233315

Alicia Ostriker
アメリカ合衆国ラトガーズ大学名誉教授